

# 人と人 つながりの物語

コープデリグループの組合員数は約510万人。組合員の皆さんの数だけ、物語がある。その物語を毎月一つお届けしていきます。描いているのは皆さんのくらしとコープデリの接点。あなたの物語はどんな物語ですか。



illustration: Maiko Dake

これは2つの失われた命の悲しみと慰めの物語。

コープの宅配を20年以上利用している花野和代さんは、配達担当の伊藤さんにもらった1枚の写真とイラストを宝物のように大切にしている。

千葉県の大網で暮らす和代さんの家では、2019年秋、次男の紘彰さんが突然倒れて亡くなり、その半年後に紘彰さんがかわいがっていたビーグル犬のハチが死んだ。

ハチが花野家にやって来たのはその12年前のクリスマス。犬を飼っていた息子たちは大喜びで、当時大学1年生だった紘彰さんとハチは、仲の良い兄弟のように暮らし始めた。散歩に行けばどこまでも遠くまで出かけ、旅先でふざけておそろいの服を買ってきて着たり、紘彰さんがネクタイを締める日にはハチにもネクタイをして写真を撮ったり、パソコンの前にハチを座らせて写真を撮ってみたり、ソファで一緒に眠ったり。家にいるときはいつも一緒に過ごしていた。紘彰さんが撮ったハチの写真はどれもユーモアにあふれていた。

紘彰さんが就職して中学校の教師になってからは、毎晩遅く帰宅する紘彰さんを、ハチは玄関で待っていた。「息子はがんばりすぎたのかもしれない」と和代さんは目に涙を浮かべて言う。紘彰

さんが亡くなってからも、紘彰さんが帰ってくる時間になると、ハチは紘彰さんの帰りを待っていた。和代さんは「お兄ちゃんもういないんだよ、帰ってこないんだよ」と声をかけるしかなかった。

「次男が亡くなって、ハチの環境は一変してしまっただのよね」と和代さんは静かに言った。

.....\$.....

毎週金曜日に和代さんの家に配達へ行っている伊藤さん。彼は犬が大好きで、配達先のお宅に犬がいると写真を撮らせてもらって、コレクションしていた。ハチも被写体になったことがあり、伊藤さんはハチのお気に入り人間のひとりだった。和代さんが「生協のお兄さんが来たよ」と声をかけると、玄関先まで一目散に駆けつけるのだった。

ある金曜日の夕方、伊藤さんが和代さんの家に配達に行くと、ハチは姿を見せたが、いつものような元気がなくどこか調子が悪そうだった。そして、次に配達に行くと、ハチの姿はなかった。和代さんが言った。

「伊藤さんと会った翌日、土曜日にハチは静かに息を引き取ったんです。きつと最期に、『伊藤さん、ありがとう』って伝えに玄関まで行ったんだと思います。ふざけて撮ったハチの写真はいっ

ばいあるんだけど、ちゃんとした写真はないの……」

悲しさに満ちた和代さんの様子を見て、伊藤さんは自分が撮ったハチの写真をあげようと思った。上司に思いを伝えましたが、写真だけではなんだか温かみがない。そこで、事業所で一番絵が上手な同僚の鮎川さんに頼んで、写真をもとにハチの絵を描いてもらうことにした。事情を聞いた鮎川さんは、丁寧に心を込めて絵を仕上げてくれた。絵と写真を受け取ったときの和代さんは「すごく感激しました。こんなことをしてもらえなんて夢にも思っていなかった」と話す。そして、

「伊藤さんは自分の仕事について、人に対して形だけで接してはいけない」という考えの持ち主なんだと思う。自分のためよりも人のために何かするような人。そういうところ、なんとなくうちの次男に似ているのよ」と言って、涙を目に浮かべたままで笑った。

ハチの写真とイラストは、今、紘彰さんの写真の横に並んでいる。

過去の物語も  
こちらから読めます



あなたのエピソードを  
お寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便(〒336-8526 埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛)か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。